

史上最強の大魔王、村人Aに転生する

1. 神話殺しの優等生

下等妙人



ファンタジア文庫

2711

C O N T E N T S

The Greatest Maou Is Reborned To Get Friends
Presented by Myojin Katou
and Gyu Mizuno

第一話	孤独なる《魔王》の未来世界転生	005
第二話	元・《魔王》様、友達が出来てウッキウキ	018
第三話	元・《魔王》様、友達一〇〇人作るべく学園へ	032
第四話	元・《魔王》様、ヤバイ奴と再会する	044
第五話	元・《魔王》様VS神の子	059
第六話	元・《魔王》様、ヤバイ	071
第七話	元・《魔王》様、育成を決意する	084
第八話	元・《魔王》様の魔法レッスン PART1	092
第九話	元・《魔王》様の魔法レッスン PART2	100
第一〇話	元・《魔王》様、一日を総括する	108
第一一話	元・《魔王》様、誘いを受ける	118
第一二話	元・《魔王》様、初めてのデートを体験する	132
第一三話	元・《魔王》様、追跡する	147
第一四話	元・《魔王》様、《魔族》と対峙する	154
第一五話	元・《魔王》様、女達に困る PART1	177
第一六話	元・《魔王》様、女達に困る PART2	187
第一七話	元・《魔王》様×バトルイベント×大騒乱	196
第一八話	元・《魔王》様の居ぬ間に……	206
第一九話	元・《魔王》様、出撃	220
第二〇話	元・《魔王》様VS狂龍王・エルザード	235
第二一話	元・《魔王》様、色々と環境が変化する	286
	あとがき	294

口絵・本文イラスト
水野早桜

第一話 孤独なる《魔王》の未来世界転生

敗北が知りたい。

いつしか俺は、そんな願いを抱きながら生きるようになっていた。

神々に等しき存在とそれに与する者達から人類を解放するために、俺は人生の大半を費やしてきた。ゆえに我が人生は常に闘争と共にあり……

軍を立ち上げて国を篡奪し、数多の英雄達を屠り、勢力を拡大し、神々を殲滅する。そうした道程の果てに。

俺は、御伽噺の怪物と同様、《魔王》などと呼ばれるようになってしまった。

民衆やほとんどの配下達は、もはや俺のことを人間としては見てくれない。神々に代わる畏敬の存在としてしか、見てはくれない。長き生の末に得たものは、孤独だけだった。

だから、己の敗北を願うようになったのだ。無様に敗れる姿を見れば、人々は俺のことを自分達と同じ人間として認識してくれるようになるだろうと、そう思ったから。

しかし念願は終ぞ果たされず……俺を倒せるほどの敵が、いなくなってしまう。

是非もなし。我が人生は詰みの境地に至つたらしい。だが、望みは絶たれていない。《魔王》・ヴァルヴァトスは最終的に、孤独な怪物へと堕ちて死ぬ。そんな運命を背負つて生まれてきたのだらう。だがしかし、来世では別の運命を享受できるかもしれない。昔のように、友と笑い合つて面白おかしく過ごす。そんな人生を歩めるかもしれない。孤独感に耐えきれなくなった俺は、早速、転生用の魔法を創造。配下達に遺書を書いて転生魔法を発動したのであった。

……そういうわけで、おぎゃ〜である。

組み立てた術式の通り、俺は遠い未来世界で平均的なヒューマンに転生した。

今の俺は《魔王》・ヴァルヴァトスではない。普通の村人・アード・メテオールだ。

さて。時が経つのは早いもので、生まれてから六年が経過した。

さすがに普通の赤ん坊であるため、この六年でやれることは少なかつた。言語の習得と魔力増幅の努力。この二つだけだ。普遍的な子供として生まれたがゆえに、物覚えも戦闘力も普遍的である。そういった事情もあり、この六年は二種の努力に費やした。

ゆえに、友達はまだいない。

まあ、今の俺は普遍的な村人である。ゆえに友達の一人や二人、いつかできるだろう。そのように高をくくっていたのだが――

季節は巡り、生まれ出でてより一〇年が経過した。……友達はまだいない。

だが、これは致し方ないことなのだ。知識の吸収という、生きていくのに必須な努力を惜しまず行ってきた結果である。ゆえに、まったくもって仕方がない。

言語をほとんど習得し終えた俺は、父の蔵書を読みふけり、この時代の知識を吸収し続けていた。人生においてもっとも重要なのは知恵である。知恵を得るには多くの知識が必要だ。であるからして、数年間自宅に引きこもり、本ばっか読んできた俺は正しい。

本日も家屋の中にある読書部屋へ赴き、床に座り込んで本を読む。

前世での城に代わる我が家は普遍的な木造住宅である。さすがに城と比べれば極めて狭いものの、両親と俺、三人で住むには十分過ぎる広さと言える。

床のひんやりした温度を尻に受けながら、俺は歴史書のページをめくっていく、と。

「ほら、やっぱここにいただろ?」

「アードちゃんはホントに本が好きねえ〜」

開かれたドアの先から、両親の声が耳に届いた。父の名はジャック。母の名はカーラ。いずれも人種はヒューマン。両者共に結構な美形だが、そこを除けば普通の村人である。

「何か御用でしようか？」

「いんや。別になんもねえけどよ」

ならば読書に集中させていたどころ。

……どうやら、俺が転生した時代は前世からおよそ三〇〇〇年後の未来であるらしい。俺の死後、統一していた世界は五〇〇年の時を経て無数の国家へと分裂。群雄割拠の時代が何度か続いたものの、今はある程度の平穩が訪れているようだ。

しかし、《魔族》共は未だに存続しており、この世界に害をもたらしているようだが。

ここ最近は特にその活動が目立つ。十数年前など、奴等の主にして前世における俺の宿敵、《外なる者達》……この時代では《邪神》と呼ばれる連中の一柱を復活させたらしい。まさに未曾有の大事件だが……それを解決した連中がまた、規格外極まりなかった。

「大魔導士と英雄男爵、か。《邪神》を三人で倒すとは、大したものだな」

生前の俺ですら、奴等を一柱仕留めるのにかなり苦労した。それをたった三人で。

彼等が規格外な存在であるだけでなく、この時代の魔法文明が極めて高レベルなものへと進化したことも大きな要因であろう。さもなければ、ただかか数人で討伐できるほど《邪神》は弱い存在ではない。……と、考えている最中。

「あらあら、うふふ」

「なんつーか、くすぐってえなあ」

おかしな反応を示す二人。なんだかよくわからんが、気にするようなものでもなからう。俺は読書に集中したのだった。

時の流れは早いもので、俺は一二歳となった。……友達？ そんなものはいない。いや、作りたいとは思っているのだ。そもそも、それが目的で転生したのだから。知識の吸収も十分したし、もうここいらで友達作りを、と、そう考えたのだが。他人が怖い。だから、話しかけることができない。

もう俺は《魔王》ではないのだが、しかしそうであっても、人はよく知らない他者を拒絶しやすい生き物である。話しかけた結果、「は？ 何お前？」みたいな目で見られたり、「お前なんかと友達になんかなりたくねーよ」とか言われたらどうしよう不安になり、そもそも声をかけることさえできていない始末。

……白状しよう。修行だの知識習得だのといった事柄は、全て言い訳であった。

本当は不安と恐怖でがんじがらめになり、身動きがとれなくなっていただけだった。

前世では《魔王》と呼ばれ、神々にさえ恐怖を感じなかつた俺だが、今は平民の子供に畏怖を覚えている。……これは非常によくはない。

危機感を覚えた俺は、身近な人生の成功者達に友達作りのコツなどを聞くことにした。人生の成功者とは即ち、我が父母である。番となり、子を生ずという時点で、俺からしてみれば人生の成功者と断言してよい。……で、まずは父、ジャックに問い尋ねた結果。「友達の作り方あ？ ハハッ、そんなの簡単だぜ！ とりあえずポッコボコにブン殴つてから、お前も今日から友達だ！ って言や——」

「それは舎弟の作り方では？」
 続いて、母の回答はこちら。

「ん〜。友達の作り方かあ〜。性奴隷の作り方なら知ってるんだけどお〜」

「どんな人生歩んできたんですか」

二人とも、人としてどこかがおかしかった。

どうやら相談する相手を間違えたらしい。そのため、我が家へ頻繁に泊まりに来る両親の友人にして子持ちの美青年エルフ、ヴァイスに相談を持ちかけたところ、

「僕もあまり友達は多い方じゃないんだけど……とりあえず、紳士的な振る舞いをするべきじゃないかな。分け隔てなく清廉潔白な態度を取り続けていれば、きっと慕ってくれる人が出てくると思う。そしたら、その人に友達になろうと誘いかける、とか」

うちの両親はヴァイスの爪の垢を煎じて飲むべきである。

彼のアドバイスをもとに、早速、俺は友達作り作戦を執行したのだった。

そして一ヶ月後。そこには笑顔で友達と走り回る元《魔王》の姿が……
 ない。そんなもの、どこにもありはしない。

むしろなぜか、避けられている。ヴァイスの教え通り誰に対しても微笑を忘れず、敬語で語りかけ、ありとあらゆる動作を無駄に洗練させて優雅に振る舞っているというのに。

慕ってくれる人どころか、声をかけてくれる人すらいねえのである。なんでだよ。

そういえばこの前、子供グループが陰で俺についてこんなことを話していたのだが。

「アードってさー、なんか変だよなー」

「変ていうかキモい」

「キモいよねー。キモいキモい」

久しぶりに世界を滅ぼしたくなった。……どうしてこうなった？

さらに一ヶ月後。季節は夏である。暑い日々が続いているが、相変わらず俺の人間関係は真冬の如く冷え切っている。それがもたらす精神的苦痛が原因であろうか、時折理由もなく涙が出てきたり、頭の一部が円形にハゲたり……なんというか、非常によくはない。

会話していると、狼が「グルル」と唸り……少女へと飛びかかった。

俺は彼女を押ししのけ、魔法を発動する。左掌を狼へ向けると、手先に魔法陣が顕現。そこから炎が一直線に伸びる。超高速で向かう線状の火炎はすぐさま標的へと到達し、全身を焼き尽くす。数秒後、消し炭となった狼がズシンという重量感ある音を響かせながら倒れ伏せた。それを見つめながら、銀髪の少女は大声をあげる。

「……エ、エンシエント・ウルフを一撃でっ!? し、しかも、『メガ・フレア』を無詠唱で発動したっ!？」

なんだこの反応は？ さっきの一回に、驚くところなどありはしないと思うのだが。

あと、エンシエント・ウルフ？ さっきの狼が？ それはない。エンシエント・ウルフは強大な精霊達が住まう危険地帯、『神域の森』に生息する魔物だ。こんなところにいるわけがないし、そもそも奴等はあんな犬つころとは違ってそれなりに強い。

あともう一点。この娘は間違ったことを言った。

「先ほど使用した魔法は『メガ・フレア』ではありません。ただの『フレア』です」
「……えっ?」

だから、なぜ驚く？ 本当にさっきの一撃を『メガ・フレア』だと勘違いしたのか？ ありえんだろそれは。何せ『メガ・フレア』と『フレア』の威力は桁が違うのだ。

前者は火属性の中級攻撃魔法。ひとたび放てば数百人は焼き尽くすことができる。それに対し、後者は初級の攻撃魔法である。ゆえに見間違えたくない。

「……そ、そうねっ! あ、あたしとしたことが、言い間違えたわっ! あはははは!」
なんだか無理やりな調子で笑い飛ばすと、彼女は上目遣いでこちらをジッと見て、
「と、ところであんたっ! な、名前はなんていうのかしらっ!？」

「アード・メテオールと申します。以後お見知りおきを」

「そ、そう。あたしは、イリーナっていうんだけど……」

彼女はもじもじと内股を擦らせながら、やがてこちらに手を差し出し、言った。

「あ、ああ、あんたをっ! あたしの友達一号にしてあげるっ!」

俺はしばし、差し出された左手を見つめることしかできなかった。

唐突な展開に、思わず固まってしまったのだ。

しかし、やがて現状を冷静に受け止め……激しい喜悦が、心の中に到来する。そして俺は、万感の思いを込めて、言葉を紡いだ。

「……私などでよければ、末永くお願いいたします」

差し出された手を握った瞬間、イリーナはビクンツ、と全身を震わせ、数秒間、「これってマジ？ 夢じゃなくて？」みたいな顔しながら片方の手で頬をつねったりする。それから——彼女はパアツと顔を輝かせるように破顔した。愛らしい顔に浮かぶ、太陽のような笑み。その顔に、俺は懐かしさを覚えた。……あいつによく似てるな、この子は。前世にて出会え、そして死別した、唯一無二の親友に。もう一度、あいつに出会えたような気がして、俺もまた頬を緩めていた。

「あ、ところでイリーナさん。握手を求める時に左手を差し出すのはいかなものかと」「えっ!? な、なんかダメだった!」

「ええ。握手の時に左手を差し出すというのは、端的に言いますと……てめえブチ殺すぞこの野郎! と、言ってるようなものです」

「ええっ!? い、いや、その……わ、悪気はなかったの! 許してっ!」
オロオロするイリーナちゃん。友達というか、娘ができたような気分だった。



第二話 元・《魔王》様、友達が出来てウツキウキ

友達が作れなくて悩んでいた俺だが、好機は唐突に訪れた。

そう、イリーナちゃんである。……ていうか、ちょっと唐突過ぎて実感が湧かない。まあ、友達ができる瞬間なんでものは往々にしてこんな感じなのだろう。

なんにせよ、イリーナと出会って以降、俺の人生は煌めきを得た。

一緒に山に出かけて遊んだり、一緒に水浴びして遊んだり、一緒に同じベッドに入って寝たりなど……マジで毎日が幸せ。前世から引きずってた孤独感はずつかりと癒え、ただただ幸せな気持ちだけが心の中にはある。

そして本日も、俺は元気に子供らしく、イリーナちゃんと野山を駆けまわる所存。

自宅にて彼女の来訪を待っていると……昼下がりのことである。

「うおーい、アードォー！ これこれ！ これ見てくれよおー！ キャツホオウ！」

イリーナちゃんではなく、鬱陶しいテンションの我が親父殿が部屋にやってきた。

その手には一振りの長剣が握られており、美しい刀身が煌めきを放っている。

「ここ最近、剣が劣化しててさあ！ だから思い切って買い換えちゃったつ！」

きやつ、なんて言いながら全身をくねらせる親父殿。非常に気持ちが悪い。

「ほらほら、見てよアードくうーん。スゲーべ、コレ？ 超薬物だべ？」

鬱陶しいテンションを維持したまま、こちらに剣を差し出してくる。

俺は柄を握り、刀身をまじまじと見つめ……

「父上。残念ながら、出来損ないを掴まされたようですな」

ほへ？ なんて声を出し、首を傾げる父。どうやら彼には、モノを見る目がないらしい。

「この剣に付与された特性は、【切れ味一〇倍】のみ。これでは手抜きもいところでしよう。この素材であれば付与術式の圧縮技術を用いることで、三種は付与が可能かと」

「……………えっ？ いや……………えっ？」

駄作を掴まされたことがよほどショックなのだろう。父がポカンとしている。

「ご安心ください。業物とまではいきませんが、普通の剣に昇華することは可能です」

そう述べると、俺は剣に付与を行い、父へと手渡した。

「……ちなみに、だけど。どんな特性を付与したんだ？」

「はい。【切れ味一〇〇倍】【火属性追加】【切れ味自動修復】の三種です」

答えてからすぐ、父は近くにあった机へ剣を振るい、角を両断した。剣には火属性が追

加されているため、切り落とされた角は燃焼しながら床に落ち、すぐさま消し炭となった。出来損ないを掴まされたことが相当頭にきているようだな。まあ、今回はモノにあたってもしようがあるまい。それぐらい、さつきまでの剣は酷かった。

「……おい、マジかよ、コレ」

刀身を見つめながら、ブツブツと眩父。ふむ、よほど腹を立てているのだろうな。ともすれば鍛冶屋の親父のもとへと殴り込みを――

「アードゥっ！ あたしが来たわよっ！」

かけかねん様子だが、もうどうだつてよくなった。やりたきややるがいい。

こちらイリーナちゃんと遊ぶのに忙しいのである。それ以外は此事である。

怒り心頭の父など捨て置いて、俺は玄関へと向かうのだった。

「お待たせいたしました」

「ううん、大丈夫！ さ、行きましょっ！」

俺の手を掴み、元氣よく走り出すイリーナちゃん。その可愛らしさは本日も変わりがない。長く美しい銀髪。人形のように整った顔。透明感ある純白の肌。そして――

薄手の白いワンピースから覗くおっぱい。谷間。横乳。

この子と友達になれてよかったと、切実に思える瞬間であった。

さて。そんなこんなで、山に到着。

「あつ、そうだ。実はさ、パパに、剣を新調したいから素材を集めてほしい。つて頼まれたんだけど……手伝ってくれない？」

「おやすい御用です。ちなみに、素材はどういったものをご希望ですか？」

「ん〜っと、確か……【アルテマ・タイガーの大牙×二】、【メテオ・スライムの体液】、

【エンシエント・ボアの魔石×二】だったかしら」

いや、そんな魔物、この山のどこにもいないのだが。どいつもこいつも超高度冒険地にしか存在しない連中である。これは彼女の父親流のジョークだろう。

だいたいコレだろうな、という魔物には目星がつくので、それを狩ることにした。

それを簡単にこなした後。俺達は遊びを兼ねた「経験値稼ぎ」を実行する。

山中のダンジョンに潜ってひたすら魔物狩り。一体を倒すごとに、自身の魔力量が微量ながらも上昇する。魔法の使い手たる《魔導士》が強くなるには、これが一番早い。

およそ五時間ほどこもつて経験値稼ぎをした後、ダンジョンを出る。俺はまだまだ余裕なのだが、イリーナがバテにバテた。

外へ出て小休憩をとる。……と、回復したイリーナがこちらを見て、

「ね、ねえ、アード。あたしに、その……無詠唱のやり方を教えなさいよっ！」

山中にて、イリーナがこんなことを言ってきた。

「これはまた異なることを。イリーナさん、貴女以前おっしゃっていたではありませんか。無詠唱なんて三歳の時点でマスターした、と」

「そ、それは、その……べ、別にいいでしょっ！ そんな昔の話はっ！」

顔を真っ赤にして、涙目になりながら叫ぶ。この様子から察するに、嘘をついたな。本当は無詠唱ができないのか。

「まあ、よろしいでしょう。ただイリーナさん。無詠唱について語る前に……そもそも魔法とはいかなるものか、お聞かせ願います」

「ふふん！ 簡単よ、そんなのっ！ 《魔王》様が創造したルーン言語！ それで作られた魔法術式を詠唱して、魔力を消費することで発動するパワー！ それが魔法っ！」

正解でしょ？ だから褒めていいのよ？ ていうかむしろ褒めて！ わんわん！

みたいな顔をしながらこちらをチラチラ見ってくる。

そんな期待に応えて、俺は彼女の頭を撫でながら褒め言葉を送ってやった。

「ふへへへ……！ ま、まあ、あたしだからね！ 当然よね！」

得意げな顔して大きな胸を張るイリーナちゃん、マジ可愛い。しかし、

「ではイリーナさん。詠唱とはそもそもなんですか？ なぜルーン言語でなければいけないのですか？ ルーン言語と魔法の関係性についてはご存じですか？」

これにはイリーナも口ごもってしまった。まあ、答えられなくて当然だ。何せ教本はそこまで突っ込んだ内容を記していないからな。もっと言えば、教本に記されている内容は下級魔法どまり。しかも、前世の時代よりも遥かに弱体化された術式が掲載されている。

これは民衆に大きな力を与えぬための措置だろう。この国の為政者はよほど民衆に力を渡したくないらしいな。掲載されている呪文の弱々しさからして、かなり民衆を恐れていると思われる。おそらく、強力な術式は貴族達が独占し、一子相伝で伝えているのだろう。「よろしいですか、イリーナさん。魔法というものは、ひとえに魔法陣の構築によって成される業です」

「魔法陣の、構築？」

「その通り。そして詠唱とは、陣の内容、術式を読み上げることで陣を構築する方法です。それをやったうえで陣に魔力を流し込む。これが魔法発動のプロセスの一つ、ですね」

俺は人差し指を立てながら、説明を続行した。

「陣の構築は詠唱だけでなく、脳内に陣そのものを鮮明にイメージするだけでも可能です」指先に《フレア》の魔法陣を顕現させる。それをイリーナに見せながら、

「この魔法陣を脳内に思い浮かべつつ、魔力供給のイメージをしてみてください」

「わ、わかったっ！」

額うんすを、掌てのひらを天へ突き上げるイリーナ。次の瞬間――

彼女の掌の先に陣が現れ、そこから小規模な炎柱えんちゅうが一直線に伸びた。

「わっ！ わわっ！ できた！ できたわ！ 無詠唱っ！」

無邪むじやき気に喜ぶさまがなんとも可愛い。心がほっこりする。

「やった！ やった、やったっ！」

よほど嬉しかったのだろう。何度も何度も、無詠唱で《フレア》を放つイリーナ。

その姿に俺は……ほっこりすると同時に憐憫れんぎんを覚えた。

魔法の威力いりよく、効力というのは、法陣に対する魔力供給の量によって変動する。

二〇かそこらだろう。ゆえに彼女が放つそれは普通よりもずっと弱い。

おそらく、イリーナの魔力量は平均値よりも遥かに低いのだろう。

即ち、才能がない。だから今後、彼女は手ひどい挫折ぶつせつを味わうだろう。さりとて……

「やった！ やった！ これでアードとおそろいだわっ！」

……たとえどんなことがあるうとも、俺はこの子を支えると決めている。

どんな悲しみだろうと、どんな苦しみだろうと、俺が一緒になって背負う。

何度挫折しても、そのたびに手を引く張って、起き上がらせてみせる。

それが、友達というものだから。

イリーナちゃん（マジ天使）との日々は流れるように過ぎていった。

そんなこんなで、俺も一五歳である。前世でもこの時代でも、一五歳となれば立派な成

人であり、職業選択せんたくを含めた人生設計けいけいをし始める年頃だ。その点については、うちの親や

イリーナの親も重々承知しており――

本日、我が家でイリーナの親も交え、進路相談の会議を開く予定である。

さて現在、時刻は夜九刻。空は闇色やみいろに染まり、黄金色の月が地上を照らし、虫達による

合唱が耳に心地良い。そんな時間に、ノックの音が響ひびいた。

両親の代わりに俺が来客を出迎むかえる。その相手は――

「こんばんわっ！ アードっ！」

夜だろうと関係なく元気はつらつなイリーナと――

「やあ、アード君。こんばんわ」

白髪はげの青年エルフ、ヴァイスである。イリーナは彼の娘むすめさんであった。

二人と共にリビングへ移動し、皆みなで食卓しょくたくを囲むと、まずは食前のお祈りを行う。

「我等が神祖、《魔王》・ヴァルヴァトス様と、女王陛下のお恵みに感謝いたします」

この時代では、俺を主神とした宗教が全世界に根付いているのだが……非常に複雑だ。

女王はともかくとして、自分に対しなげ感謝の念など捧げねばならんのか。

「さ、辛気くせえお祈りも済ませたし、食え食え。今日も美味えぞ？ アードのカレーは」

「わーいつ！ いっただっきまーすっ！」

もくもくとカレーをかつこむイリーナちゃん。食いしん坊ぼうなどころも可愛らしい。

「うふふ。イリーナちゃんは相変わらず可愛いわねえ。お母さんにそっくりだわあ。

……ああ、快樂責めしたあゝい……」

危ない発言をする危ない顔した危ない我が母者のことなど目もくれず、イリーナはカレ

ーに舌鼓したづみを打っている。……ちなみに彼女の母親についてだが、詳しいことは知らない。

この場に出席していないということからして、なんとなく察しはつくが。

さて。主にイリーナちゃんのおかげで楽しい食事の最中。

「もうそろそろ、話をしようか」

ヴァイスがスプーンをテーブルに置きつつ、こう切り出してきた。

その中性的な美貌びようには柔和な微笑ほころが浮かんでいるものの、瞳ひとみには真剣しんけんな光がある。

「まずアード君。君はこれから、どうしたい？」

「そうですね……やりたいことはいくつかありますが、目下達成したい目的はと問われたなら……友達を一〇〇人ほど作りたいですね」

「はは。君はなんというか、本当に読めない子だね」

なぜだか苦笑しつつ、ヴァイスは続いて、イリーナに水を向ける。

「君はどうする？ 本質的な将来は、既に確定しているけれど、そこに至るまで、まだまだ時間的余裕はある。その間、君はどうしたい？」

「うーん……まあ、とりあえず、その……ア、アードと一緒にいたい、かな」

照れくさそうに紅い頬ほおを掻きながらそっぽを向く。イリーナちゃんマジ可愛い。

「うん。二人の気持ちはわかった。となるとやはり」

「魔法学園へ入学するのがベストだね」

「アードちゃんのやりたいことにピッタリだし、イリーナちゃんの願いも叶うしねー」

学園。その単語を聞いた瞬間、俺はズキリと胃の痛みを感じた。

友達作りがしたけりゃ学園に通うのがもつとも手っ取り早い。かつて前世でそう考えた

俺は、外見を普遍的な醬油顔しょうゆがほに変え、経歴けいれきを偽り、学園に入学したことがある。

正体を隠し、別人として生きれば友達ができるのではと考えた末の行動だったのだが……学園内にて、俺は見事に孤立した。ていうか、いじめられてた。

《魔王》とか呼ばれてるくせに、下々の連中にいじめられてた。

ちよっと授業中、用を足しにトイレへ行っただけなのにウンコマンというあだ名を付けられて笑いものにされたり、心ない連中に机や教本を汚されたりして……結局、一年程度で自主退学した。そういうわけで、学園というのは俺にとってトラウマの宝庫なのだが。

「魔法学園っ!?　なんだか楽しそうねっ!」

目をキラキラと輝かせているイリーナちゃんを前にして、まさか入学したくないとは言えぬ。守りたい、この笑顔。ゆえに俺は。

「異存はございません。イリーナさんと共に魔法学園へ入学いたします」

「うん。それがいいよ。きっと友達もたくさんできるだろうし……特にアード君。君にとっては常識を学ぶいい機会だと思っ」

常識?　そんなの誰よりも理解しているつもりだが。何せこちとら元・《魔王》である。ありとあらゆる常識・マナーを習得していなければ外交などできはしない。

まあ、ヴァイスにとっては俺もまだまだ単なる子供、という認識なのだろう。

ここは素直に頷いてから……別の話題を切り出す。

「ところで。入学するのはいいとして、我々にそうした資格があるのですか?」

「うん?　資格、とは?」

「魔法学園について、私はよく存じ上げませんが……平民が入学を許されるような場所、なのでしょうか?　お貴族様専用の学び場という印象が強いのですが」

「その点については問題ないよ。一昔前は今以上に貴族の平民蔑視が強くてね。学費の高さなどもあって平民は魔法学園に入学できなかったんだけど、今はそうしたこともなく、学園は広く門戸を開いてる。……というか、君達が入れない場所なんてどこにもないよ」

「——?　それは、どういった意味ですか?」

首を傾げると、ヴァイスもまた同様に小首を傾げ、

「……なあ君達、この子に何も話してないのか?」

我が両親を見やりながら、問いを投げた。

「いやあ、なんつーかよ。人の武勇伝聞くのは好きだが……」

「自分のことなんて語りたくないのよね。なんだか恥ずかしいし」
照れ笑いを浮かべる二人に、ヴァイスはため息をついた。

それから彼は、俺のことをジツと見据えて、

「いいかい、アード君。これから語ることは、真正正銘の真実だ」

そのように前置いてから、ヴァイスは……衝撃的な内容を口にした。

「君の両親はね、かの名高き大魔導士様。そしてこの僕は、恥ずかしながら英雄男爵と呼ばれている。要するに、君の親も僕も、特別な存在というわけさ」

「えっ」淀みなく紡がれた情報に、俺は思わず間の抜けた声を発していた。

ヴァイスの表情には、冗談の気など微塵もない。彼の発言は事実とみて間違いないからう。……少々、現状は気に食わないものであった。

俺は特別な存在になるということをも、自分でも引くぐらいに拒絶している。

過去、《魔王》と呼ばれるほど特別な存在になったことで、様々なものを失ったからだ。特別な存在になるというのは、孤独になることと同義なのである。それを知っているがゆえに、俺は特別なことを嫌うし、そうなることを避ける。

ではあるが受け止めよう。幸いにも、書物によれば父母は突然変異体である。突然変異体とは、種族の限界を超えた異常な才能を持って生まれた者達の総称だ。

彼等の才覚は一代限りで、次世代に受け継がれることはない。それだけが救いである。親が特別でも俺は特別ではない。ゆえに……再び《魔王》と呼ばれることにはなるまい。

以降、会議は穏やかに過ぎていき、大きく採めることもなく終了。

そして、食事も終わりに近づいた頃。

ヴァイスがこちらを見て、真剣な面持ちで口を開いた。

「……学園でも、イリーナのことをよろしく頼んだよ、アード君」

親としては当然の言葉、なのだが。なぜだろう？

ヴァイスの顔には、必要以上の緊張と不安が張り付いていた。